

やりたいこととお金のジレンマ

水戸 はな

はじめに

近年雑誌やテレビなどで地方での暮らしが紹介されることが増え、都会を離れた暮らしに注目する人も増えているのではないかと思います。しかし田舎で好きなことをして食べていくのはメディアで見るほど楽ではないはずだ。そこで今回は地方でやりたいことを仕事にして生活しようとするひとの抱えるジレンマについて研究・考察する。

仮説

まず表1のように仕事を①やりたいかつお金になる、②やりたくないがお金になる、③やりたいがお金にならないの三つに大きく分類し、この「やりたいがお金にならない」ことをやるためには、さほどやりたくはないがお金になる仕事も受けているのではないかと仮説を立てた。またそうすることで、やりたくないことに時間を割いてしまっているが実際問題お金は必要であるという新たなジレンマが生じるのではないか。

	お金になる	お金にならない
やりたい	(1)	(3)
やりたくない	(2)	

表1

検証1

検証はインタビュー形式で、新潟でやりたいことで生活していこうとしている方を対象に、2度に分けて行った。はじめにやりたいこととお金のジレンマについて論文を書いているということを伝えた上で、それぞれの仕事について（難しさ、面白さ、お金になるならない）話していただくことにした。

一件目は津南町のMさんにお話を伺った。Mさんは普段、委託で文章を書いたり旅館などでバイトをしたりしていて、訪問した当時は民泊やワークショップをやるために古民家の改装もしていた。彼女の「やりたいこと」は、魅力的な地域で自分がしたい暮らしをすること、そしてそれを共感してくれる層と共有することだった。民泊もその手段のひとつだった。これらのことはまさに「やりたいがお金にならない」ことなのだが、実際はお話を伺ってみるとそれほど強くジレンマを持っているわけではなかった。民泊の準備の費用はクラウドファンディングで補填している。文章を書くこともバイトもやりたい仕事を選んでやっている。収入は多いわけではないけれども津南での生活にはそれほどお金がかからないから困ることもないそうだ。表に当てはめると、Mさんの場合は大体(1)で完結しているようだった。

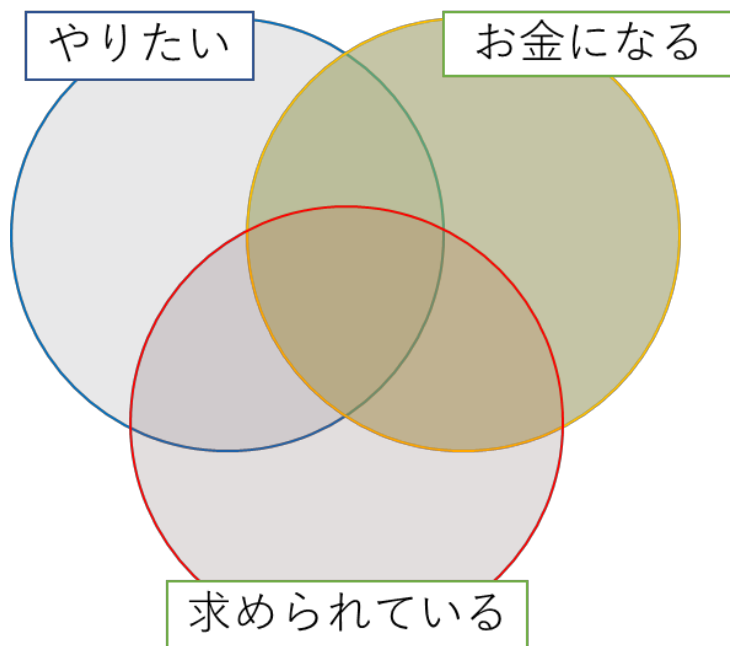
二件目三件目とお話を伺っていく中で、途中、今回の取材をサポートしてくださった方の仕事場の方とも話す機会があり、お金にならない上やりたくもないが付き合い上やらざるを得ないこともあるという話になった。私ははじめに自分で作った表に改善の余地があるのではないかと思い始めた。

さらに、ライター・編集者でNPO職員のKさんにインタビューしているときに、「市場社会から求められているか」という新しい軸に出会った。Kさんのやりたいことは農村での丁寧な暮らしである一方、社会から必要とされる仕事をすることである程度の収入を得ることでもある。Kさん本人は農村での暮らしと一般社会の中で得るある程度の収入という2種類のもののはざまにジレンマを感じる部分もあるようだったが、私から見るとやりたい暮らしをするという軸と社会から求められるという軸を両立して

いる新しいパターンの暮らし方に見えて、とても新鮮だった。

これらを踏まえて私は仕事の分類表に改善を加えた。(図1)

図1



やりたくないという表現を使わず、『やりたい』の外』として表し、代わりに「求められているか」という軸を加えた。

インタビュー一回目で分かったことは、個人であれば「やりたいこと」の枠の中だけで生きていくことは可能だが、組織の場合はまず大事になるのがその組織が来年も存続していくことなのであまり無理ができないということ、お金を用意するには仕事をする以外にも補助金やクラウドファンディングといった手段もあるということだった。

検証2

検証1で分かったことを踏まえ、今度は新潟県柏崎市を中心にインタビューをした。

はじめに障がい者雇用のKさん、次にスポーツトレーナーのIさんにお話を伺ったのだが、双方とも検証1で改善した図に当てはめられなかった。

まずKさんが大切にしているのは、

- ・障がいを持つひとがごく普通に働ける環境(福祉の名の元に作られる「優しい差別」をなくしたい)
- ・障がいを持つひとが買いたいものを買って自由に生活できるくらい稼げること(従来の障がい者雇用では時給が100円足らずのことも多い)
- ・社会の役に立つ仕事であること(福祉施設が作りがちなマグネットやキーホルダーではビジネスにならない)
- ・外に向けての発信(内輪で盛り上がりしても意味がない)

これらはすべて、「やりたいこと」に分類しようと思えばできなくはないのだが、インタビューをしていて、Kさんは仕事に対してやりたいかどうかやお金になるかどうかという抽象的な考え方をそもそもしていないのではないかと感じた。Kさんの場合、先述した大切にしていることのの一つ一つがすでに思考の軸だった。

次にお話してくださったIさんはスポーツトレーナーでジムを経営している。やりたいことは主に運動をする機会の創出や情報の発信である。10年後20年後を見据え、特に若い人に働きかけているとおっしゃっていた。しかしここにはひとつ大きな問題があった。それは柏崎の人々には運動にお金を払うという価値観がなかったという点だ。対象が高齢者であればまだ寝たきり予防に運動が重要であることはよく知られているのでニーズがあるのだが、それ以外となると人々は途端にお金を出し渋る。東京で6000円で引き受けていた仕事が3000円でないともらえなかったり、東京で2000円の会費で行っていた活動も300円まで下げなければ人が集まらなかったりする。これまでお話を伺った他の方々とIさんの大きく異なる点は、Iさんが現在取り組んでいるのはニーズの創出であるという点だ。そのため、図1

でいう「求められている」の軸がそもそも存在しない。ニーズがないところに利益はなかなか発生しないので、当然ジムの経営は楽ではない。

両者の共通点は、まず思考を図表化しようとしたが軸が多すぎたり方向が様々だったりしてできなかったことだ。

加えてもう一点、ジレンマをあまり感じていないという点が挙げられる。Kさんは銀行に借金がある状態、Iさんはニーズの創出の段階にいるため利益を生みにくい状況であり、どちらも決して楽な立場ではない。外から見ればどちらも、お金にしにくいことを仕事にしているが組織が続いていくためにもそれぞれの生活の為にもお金は必要であるというジレンマの中に見えるように見えるのだ。しかし本人たちはそのようには感じていないようだった。

考察

検証2を踏まえて検証1をもういちど振り返ってみると、単純な表や図で整理できたように見えたこともよく考えてみるとどこにも当てはまらないものがあったりその人独自の軸やこだわりがあったことに気づいた。そして当たり前と言えれば当たり前なのだが、人の思考は同じ軸を基準にした同じ図表では表しきれないことがわかった。

またもう一つ気付いたことは、思ったほどやりたいこととお金にジレンマを感じるひが多くなかったという点だ。さらに興味深いのは外から見るとやりたいこととお金のジレンマの中に見える人でも実際それをジレンマと思っているとは限らないということだ。私はこれを東京に持ち帰って考えてみることにした。

「ジレンマ」とは、相反する二つのことの板挟みになってどちらとも決めかねることだ。ということは本人が二つの相反する事象を受け入れている状態であれば生まれない。人は皆多かれ少なかれ自分の中で優先したいいくつかのことに折り合いをつけて生きていると思う。少なくとも今回インタビューに答えてくださった方はそうだった。私は、いろいろなことに折り合いをつける中で自分が納得できるバランスの位置を見つけてそこにいる人は、外から見てその状況が「ジレンマ」に当たるとしてもそうは感じていない場合が多いのではないかと考えた。

やりたいこととお金に限らず、ジレンマの根源は「今の自分」と「なりたい自分」の乖離だと思う。だから、ジレンマを解消する方法は、一つは自分の中で折り合いをつけて自分を満足させること、もう一つは理想と現実の乖離を埋めようとする事なのではないか。

協力して下さった方々

井上有紀さん(にいがたイナカレッジ)

阿部巧さん(にいがたイナカレッジ)

金子智也さん(にいがたイナカレッジ)

稲垣文彦さん(中越防災安全推進機構)

水戸部智さん(柏崎まちづくりネットあいさ)

宮沙織さん(柏崎まちづくりネットあいさ)

富樫望未さん(柏崎まちづくりネットあいさ)

唐澤頼充さん

池戸熙邦さん

諸岡絵美子さん

西田卓司さん

吉野さくらさん

小川祐子さん(アトリエ装ウ)

小林俊介さん(株式会社 With You)

西村遼平さん(里山 café I' m Home)

矢島衛さん(EALY CAFE)

五十嵐健太さん(からだ Fine!)